

昭和16年から昭和20年 小高神社にあった防空監視哨

*〈防空監視硝〉は、戦時中に常呂村役場の北側に隣接する通称〈小高神社〉(注：現在の中央児童公園)と呼ばれる小高い丘にあった米軍の空襲を監視する施設です。昭和16年の防空監視強化のための防空監視隊令公布に伴い設置されました。

*『共立百年史』(平成7年刊)記載の〈防空監視硝〉の文を編集し、常呂村役場「当直日誌」や他の資料から関連事項を加えてまとめました。

※後藤護氏記載文を編集

■昭和16年

昭和16年、いよいよ世界情勢は陰悪となり、7月31日、対英戦線布告(注：7月26日 イギリス政府が在英の日本資産を凍結したこと)に伴い、我が北辺の地北見地方もオホーツク沿岸沿いに防空監視硝が置かれ、常呂にも小高神社前、現大友呉服店南東の砂丘上に監視硝が建てられた。監視硝は2階建てで、その上に四角い立ち見台と12尺の望楼が町内の大工によって完成。見晴らしの良いものだった。

注：小高神社は、「相馬妙見小高神社」と称号し、大正5年に御堂建立、大正12年に拝殿を建立。小高神社がある小高い丘一帯を〈小高神社〉と呼んでいました。

7月19日 網走警察署長・部長・巡查来庁。監視硝員講習会に関して協議す。「当直日誌」

7月27日 常呂村会議事堂において防空監視硝講習開催。出席全員。網走警察署長・部長来村。監視硝全●活修理、本日練習に使用す。「当直日誌」

8月14日 北海道特別防空訓練実施協議会開催、午後2時終了。「当直日誌」

8月15日 1箇班が副硝長1名、硝員6名の6箇班編成で、午前7時全硝員が村会議事堂に集合、開講式を挙行

午前9時より防空訓練開始。(本日より31日まで)「当直日誌」

下川沿(注：共立地区のこと)の班は20日と26日の2日間の勤務。1昼夜24時間午前7時交替。

8月20日 防空監視硝員交替。下川沿の硝長・長船栄一、副硝長・斉藤正雄、硝員は麻島助恒、田中忠男、中島武甫、安達武、大友義男、後藤護で、1時間交替で立哨、通信、休憩の順で交替勤務。

8月26日 安達武の代わりに安藤治男が勤務。

8月31日 正午、訓練終止命令あり。「当直日誌」

午後1時、村会議事堂において防空演習修了式。

10月12日 午前7時30分、村会議事堂に集合、第2次防空演習開講式、午前9時終了。本日の勤務は市街の第1班。

10月16日 第6班勤務。

10月21日 防空演習修了式。

11月27日 午前4時、全硝員臨時招集、網走警察署長、村長の訓示後解散。

12月20日 防空監視硝勤務下令、本日より1班から勤務「当直日誌」

■昭和17年

2月6日 常呂村村会議事堂において監視硝員講習。
2月7日 監視硝実地勤務。
3月12日 本日より監視硝員実地勤務となる。
3月13日 網走町役場にて監視硝員講習会。
3月17日 本日よりいよいよ下川沿の班が実地勤務となる。硝長・長船栄一氏。
4月3日 本日、監視硝員全員集合。網走警察署長より、全員重病あるいは入隊者の外は昭和20年3月11日まで勤務のこと。不平言う者あらずば千円の罰金あるいは1年の懲役の由。「当直日誌」

■昭和18年

5月23日 齊藤正雄氏応召のため、副硝長・川谷守氏となる。
9月10日 長船栄一氏退任、後任に多田勇氏となる。

■昭和19年

4月1日 本日より2交替となる。
7月8日 常呂村長から札幌通信局長宛に、防空監視硝設置により、1日平均百回以上の防空通話があるため、網走常呂間の電話1回線増設を陳情(陳情書)
9月1日 警戒警報発令。「当直日誌」
12月18日 午後1時より議事堂において防空監視硝舎落成式挙行(網走警察署長、北海道庁警部補、卯原内防空監視硝長、北海道新聞記者、加藤校長、上杉局長、新谷廣治氏、上杉隆昌氏、山田久七氏その他20名出席)。盛宴の後、午後3時半終了。
「当直日誌」

注「当直日誌」には、11月26日から12月7日まで、監視硝員が役場に交替で宿泊したことが記されています。12月18日の防空監視硝舎落成式は、それまでの簡易的な監視硝舎を整備し、12尺の望楼(物見やぐら)建設落成を指し、11月26日から12月7日まではその工事期間だったと推測できます。

注「豊川開基百年記念誌 ふるさと」(平成7年刊)にも(防空監視硝)に触れている箇所があります。

「昭和18年に入ると、常呂村もはや銃後の地域とはいえず、アメリカ軍の空襲に備え、常呂公園(注：小高神社のこと)の丘に防空監視硝が設けられ、応召と挺身隊と勤労奉仕隊の編成などで屈強な男子がなくなった村にあって、10代の少年たちが哨戒の任にあたった」(注：監視硝の設置は昭和16年)

※羽石昇さん記載の文を編集

昭和19年4月1日付けで常呂村村長から「民防空監視硝員を命ず 4月1日10時監視硝前に集合」の委嘱状が来しました。

さっそく自転車で出席しました。行ってみると佐藤勝明、富田、安藤英一、河野護、内藤勝保、片岡正一、林清、羽石の8名の皆さんが集まっておられました。

村長の挨拶、硝長の訓示では、「官民一体となって我が国を護らなければ大東亜戦争を勝ち抜くことはできない。我らも時局の重大さを認識して民防空の第1線で頑張ってもらいたい。明日からは訓練に入り、訓練が終わり次第、3交替24時間勤務をお願いする。後のことは先輩

硝員が指導するので、そのつもりでいるように」との話でした。指導硝員は小原徳男、木田巴氏2人で、1人が4名を受け持ち、防空硝の目的・各自の分担・立哨・通信・勉強とずいぶん厳しいものでした。

監視硝は現小高神社のある砂山の一番高い所にありました。2階建ての小屋の上に四角い立ち見席があり、東西南北に分かれていました。立哨は、先輩硝員と2人で全神経を集中して小さな爆音も逃さず報告します。

例えば、立哨で「発見。北、敵1機、東へ進行」などと報告し、通信員が直通電話で立哨員の報告通りに北見監視隊本部へ報告、本部は軍の基地へ直通することになっていました。

監視硝の勤めも大分慣れた頃、本土決戦を口にするようになり、立ち見席の上に12尺の望楼が町内中の大工さんの手によって完成し、見晴らしの良いものでした。

私らが監視硝へ通うのは夏は自転車、冬はスキーで、どんなに急いでも私の家から1時間はかかったものです。朝早く近道をして行くと野犬と出会い、遅刻したことや自転車もスキーも乗れない時は小走りで通ったのを思い出し、良く勤めたものだと思いきこします。

当時の硝員の日当は、昭和17年が1円60銭、18年は2円、19年は3円。食事は3食とも役場の小使いのおばさんに作ってもらいました。19年は米ご飯でしたが、20年には大豆・麦、終戦近くには小麦ご飯を食べたのを思い出します。

私が硝員として勤めた終戦までの約17ヶ月、先輩の方々を兵隊として軍隊へ数多くの皆さんを送りました。硝の先輩である後藤護、麻島助恒、大友義男、安藤治男さん方も次々と出征されたことを思い出します。

注「紅の海 網走空襲犠牲者の記録」(網走歴史の会刊)の中に、空襲の犠牲となった松田

武さんが監視硝員に委嘱されたときの辞令が紹介され、「網走防空監視硝員 (氏名)

職務勉勵二付其為賞金十円給与 (年月日) 網走町役場」と記載されています。このこ

とから、羽石昇さんも同様に常呂村村長から委嘱辞令を受けたことが判ります。

※以下は、さまざまな資料(常呂図書館所蔵)や証言を元に、防空監視硝をもう少し具体的に見ていきます。

●昭和3年生まれで豊浜地区に住む中股かず子さんの思い出

私は昭和20年、終戦間近の2〜3ヶ月間、常呂駅前にあった軍の事務所でした。場所は常呂駅前交差点の旧松久食堂のところで、交差点には他に日通、青木旅館がありました。軍の事務所には准尉ら3〜4人がいて、私ともう1人の女性が掃除や片付け、雑用事務仕事をしていました。私たちは食事の用意はせず、別な人たちがしていました。

防空監視硝は小高神社にあり、小さく2間くらい的小屋のようだったと記憶しています。監視は青年団の人たちがしていました。

小高神社は今のような公園ではなく、古い忠魂碑の裏手に常呂劇場がある他は林が広がり、旧大友呉服店や現常呂ハイヤーのあたりまで一面林でした。昭和20年7月15日の常呂空襲では空襲警報が鳴り、私たちは防空壕に入らず、その林に逃げ込みました。1機の飛行機が南から北へ、陸地から海の方へ飛んでいくのを見ました。

※昭和19年に「常呂村防空監視硝後援会」が組織されます。この後援会に関して、「吉野部落防空監視硝後援会会費徴収依頼」の資料を紹介します。

昭和19年8月17日付で、吉野部落会長から各班長宛に、「9月6日正午に重要な案件があるので全員集合するようお願いする」内容の通知文を出し、吉野第1班8軒に対して「防空監視硝後援会会費徴収依頼」として会費割り当てと追加割り当てをし、8月24日までに送金するよう通知しています。8軒の会費割当金額は合計30円68銭。1戸当たり3円80銭です。

注：昭和20年常呂村人口調査照査表¹では、当時の戸数は1273戸。戦後戸数が増えたことを考え、約1200戸に3円80銭を掛けると約4500円になります。正確な金額は分かりませんが、村ぐるみで集めたかなりの金額の後援会会費が監視硝舎・望楼建設経費や監視硝員のさまざまな活動費に充てられたと考えられます。

注：吉野(42戸)は、日吉の奥にあり、端野村に接するもとも奥の登(24戸)に次ぐ小さな集落です。この集落で目標金額を設定して徴収したということは当然、常呂村全体に及んだと考えられます。

注：「値段史年表 明治・大正・昭和」(朝日新聞社刊)から当時の物価を参考までに紹介します。戦後の昭和20年は、急激な物価高・インフレになり、以下の値段から大幅に上がりま

す。

- * 巡査の初任給 大正9年から昭和19年まで45円
- * 小学校教員の初任給 昭和16年 50〜60円
- * 東京の入浴料金 昭和19年 12銭
- * ビール大びん 昭和19年 1円30銭(配給制)

● 國枝奉征さん(昭和17年生まれ)が聞き取りした青年学校の生徒が監視硝員をしていたこと
國枝さんが安藤栄一・後藤護(共立)・内藤勝保(土佐)・梅田勇俊(岐阜)4氏に聞き取りしたところ、「4氏は終戦時15歳から18歳。国民学校高等科を卒業した男子は地域の青年学校に入學し、20歳の兵隊検査まで軍事訓練が義務づけられていた。硝員は青年学校の生徒で14歳から17歳の少年たちだった。地区ごとに班を組み、定期的に交替勤務をしていた」とのこと。

また、國枝さんの父親・一雄さん(大正4年生まれ)は昭和15年から20年まで青年学校の指導員・教官を務め、その父親から青年学校の修了者は普通24ヶ月の軍務が18ヶ月に短縮され、除隊時には1等兵になると聞いています。

● 長船泰久さん(昭和13年生まれ)が語る監視硝の思い出

父親は常呂村職員で、後藤護さんが書いているとおり、監視硝長(昭和16年8月〜昭和18年9月)をしていました。そのせいもあって、小学校に入る前は監視硝へ遊びに行き、硝員だった青年団の人たちにかわいがられました。

小高神社の忠魂碑に向かって右側に小高神社があり、忠魂碑の正面少し左手前に監視硝がありました。建物は立派とは言えず、平屋の上に四方が見渡せる監視台があり、室内に階段がなかったため、外から上がるようになっていたと思います。後藤護さんが2階建てと書いたのは、この監視台を含めての2階だと思えます。(注：戦後一時期、この監視硝だった建物に住んでいたKさん家族も建物は平屋だった。ただ、玄関の左側に火の見やぐらのようなものがあった記憶があると語っています。)

内部の部屋は2間で、片方は事務所、もう片方は仮眠できるような部屋だったと思います。鮮明に覚えているのは、事務所には机1台とイス数脚があり、天井から日本軍と米軍の主だった飛行機の模型がいくつもぶら下がっていて、B29の模型はなかったこと。木製ではなく今でい

